

令和５年度 第１回京都市木の文化・森林政策推進本部会議（令和５年４月２６日）

本部長（岡田副市長）指示

木の文化・森林政策推進本部の設置から、この２年間で着実に成果を積み上げてきたところであり、今後の森林政策を推進する上での土台をしっかりと築くことができたと考えている。これも、従来の林業振興の延長線上ではない、全庁的な視点で各局区の施策を融合して取り組んできた結果である。

これまでから林業振興、森林政策に取り組んできたが、今までどおりの取組では現状を打破することができないため、この推進本部の取組では、思い切って、異なる手法で、積極的にやってみようということである。

現在、森林経営管理法の施行や木材の利用促進に関する法律が改正されるなど、国や府の制度、財源が活用できる状況である。この機を捉えて、今、集中的に施策に取り組み、「この機を逃せば、この先、京都市の林業振興は成り立たない。変えられない。」くらいの気概を持って、皆さんには是非、アイデアを出して、強力に進めていってほしい。

また、文化庁が京都に全面的に移転し、新たな文化行政がスタートした。「文化首都・京都」としての役割は非常に大きく、都市の成長戦略に掲げる「木の文化都市・京都」の取組を加速させる重要な１年でもあると考えており、市内産木材の需要拡大につながるサプライチェーンの構築など、成果を上げてほしい。

こうした観点から、皆さんに２点お願いする。

１点目は、「攻めの姿勢」である。

木は植えてから木材として利用するまで、約半世紀もの年月がかかるため、長期的な視点が必要であり、林業等が抱える課題解決にも一定の時間を要する。だからといって「待ち」の姿勢ではいけない。国の森林経営管理法の施行などについても言及したが、チャンスがあったときには逃さずにつかみ取ることが大切である。チャンスを逃せばそれがピンチになる。是非、このチャンスを捉えて、積極的に攻めの姿勢で取り組んでほしい。

今の世の中、失敗への寛容さがどんどん無くなっていると感じている。失敗するとすぐ批判され、攻撃され、やりにくいこともあるが、この推進本部の取組については、失敗を恐れず、攻めの姿勢で積極果敢にチャレンジしてほしい。また、積極的にチャレンジしたにも関わらず、失敗したものについては寛容な姿勢で臨みたいと考えているので、是非、面白い取組を進めてほしい。

２点目は、「成果へのこだわり」である。

課題解決に取り組む中で、ややもすると、本来の目的を見失い、あたかも、手段・手法が目的であるかのような勘違いをしがちである。本来の目的をきちんと見据えながら、取り組んだ結果を評価し、思うように成果が出ていないときは、違う方法を試したり、思い切って、今の取組を止めて、新たなものに見直したりするなど、徹底的に成果を上げるということにこだわって取り組んでほしい。

そういった思いから、今回の資料にもできるだけ数字を入れるよう指示をしたところである。

最後に、毎年、推進本部会議でも伝えていることであるが、楽しく、前向きに仕事をするという姿勢も忘れずにお願いしたい。